

## AAスクールの建築教育の特徴

独自性と創造性を重視した建築教育

## 辻健夫

ロンドンにあるAAスクールは、リチャード・ロジャーズやナイジェル・ゴーツといった個性豊かな有名建築家を多く輩出している学校としてだけでなく、そのユニークな建築教育についても話題を事欠かない学校である。問題点も含めてその教育の特徴を探ってみよう。

## □

AAスクールの建築教育の特徴を語るに、ユニットシステムのことは欠かせない。これは10~15人の学生に対し1~3名のチューターからなる小さな学校のようなもので、現在1年生に4つ、2・3年生に9つ、4・5年生に12のユニットが用意されている。年間を通じてのプログラムは、各ユニットに全面的にまかされているため内容はさまざまである。このシステムが、この学校の多様性とダイナミックな校風を支えるひとつの理由になっていると同時に、多くの誤解を生じさせている原因ともなっている。具体的な建物の設計を目指すものから前端的、概念的なデザインを行うものなど、さまざまなユニットがあるにもかかわらず、あるユニットのカラーがAAスクール全体を代表するかのようには解釈されることでは、各ユニットのプログラムは年度はあっても全学生に説明される。学生はその中から気に入ったユニットを選び、面接を受け、承諾されればそのユニットの学生となる。したがって、学生は面接に持参する作品集をできるだけよいものにしようと努力を払い、各ユニットもよい学生を集めるため魅力的なプログラムをつくるよう努力する。この関係がAAスクール全体のレベルを維持しているひとつの理由となっている。運営状況や進級、卒業状況などから、学長の判断で毎年3分の1のユニットが入れ替えられる。評判のよいユニットは残り、そうでないユニットは消え、フレッシュなユニットがそれに加わる。したがって1年目に過ぎたユニットが次年に突然なくなるという状況も当然起こる。最近、デザイン教育において、ユニットシステムが創造性を高めるという教育効果が認識され、ロ

ンドン大学バートレット校や東ロンドン大学、北ロンドン大学でも取り入れられている。このようにユニットによってプログラムがまったく異なるため、一概にその特徴を説明することはできない。しかし、教師の指導の傾向や方法については、各ユニットに共通するものがある。

①課題の多くは、住宅や学校といった建物種別のもではなく、きっかけを学生に与えるものであり、柔軟で扱う範囲が広い。学生は其中で自分の興味を発見し、それを発展させる中から独自の命題を設定するというスタイルを取る。したがって、その表現も多様で、建物以外にオブジェ、インスタレーション、パフォーマンス、映画、音楽なども含まれている。

②学習は基本的にチュートリアルとジュリーによる設計教育が中心となり、理論や歴史、構造や環境など建築一般教養としての各講義がこれをサポートするかたちとなる。チュートリアルは教師と学生が1対1でプロジェクトについて詳しく話し合い、問題点と可能性を認識する場であり、ジュリーは各学生が講評者に対して作品を説明し質疑の場に答える訓練、客観的に批評を受ける場である。

③作品の評価は、いかに深く各自の興味を探索したか、作品が力強く魅力的であるかという点が問われる。これは、いかに巧みに条件を解決して設計したかという設計技術の習得具合の評価軸とは異なり、各学生の独自性と創造性の開拓具合に焦点を当てた評価軸といえる。

④成果物は設計結果のみならず、そのプロセスを重視する。学生が課題に対し、どのようにアプローチしたのか、何を考え何を求めたのか、どう発展させてデザインしたのかという点を問う。したがって作品集の結果はもちろんのこと、結果に至るまでの道程を表現したものとなる。

⑤実体験を重視する。資料のみ頼る設計は、その掘り下げが甘く個性のないものになりがちである。学生自身の観点から独自の方法でアプローチし、実際の体験を通じて得られたアイデアによるデザインは、創造性豊かで説得力のあるものになり得る。これらの考え方の基本は、建築を広い観点からとらえ、建築の知識を単に伝授する場ではなく、学生の個性を限りなく開拓する教育の場という姿勢である。これは合理的な設計方法論、一方通行の設計指導が支配的な現在において考えさせられる点が多い。一定レベルの建築知識を得る意味と建築技



学期末のジュリーの様子。右側からチューターが参加する。

術者を育てる教育の意味においては、ここでいう建築教育が十分とは決していえない。またいくつかの問題点も指摘できる。独特なプログラムであるがゆえに、ついていけずに途中で脱落する学生が毎年5~10%いること、ある特定のプログラムの中で獲得した能力と知識以外の部分についてはどう補充するのか、入学の判断基準における面接教師の判断のバラツキの問題などである。しかしながらそのユニークな建築教育、建築家を育てるという校風を求めて世界中からやる気のある多くの学生が集まってくるという事実は見逃すことはできない。

## □

私自身AAスクールに入った当初は、言葉の問題も含めてこのユニークな教育にぜひ入らなされた。ほとんど未知のもので、建築の考え方そのものの改革を要求されるものであったからである。チュートリアルごとにアドバイスの方向が変化し悩まされた。予想していたプロセスから外れまったく関係のないようなことを不安の中を探求したり、プロジェクトに関係するものを実際に手に入れスタディしたり（私は服飾デザインのゲームモデルとタクシードア2枚を買った）、敷地の調査で落ちているガラクを集めて分析をしたり、変わった人を見つけて追跡しその人と都市の関係を考察したり、パーソナリティの探求で自分の体のキャストをプラステイクでつくったことなど、一見奇妙なことを多く経験したが、今私は指導という立場を変えて同じようなことを学生に要求している。どうやら、この意味と重要性については理解したようである。

むらじ たけお/1956年京都府生年/1979年多摩美術大学卒業/1982年東京都立大学大学院修了後、1991年までバコー・ポーション設計事務所、1991年AAスクール入学、1994年同大学院修了後、同助手、東ロンドン大学非常勤講師